

講演「クレーと自然」に寄せて

仲間裕子

講演「クレーと自然」（2011年3月14日、於：立命館大学アート・リサーチセンター）は、チューリヒ大学美術史研究所のヴォルフガング・ケルステン教授と同研究所のベッティナー・ゴツケル教授によって行われた。なお、この講演は、同時期に京都国立近代美術館で開催された「パウル・クレー—おわらないアトリエ」展に協力されたお二人の来日によって可能となった。展覧会を監修されたケルステン教授は、クレーに関する多くの著書と論文、またクレー日記の編集などを通して、クレー研究に長年貢献され、日本でも『クレー「大はしゃぎ」—芸術家としての実存の寓意』（訳：池田祐子、三元社）、『クレーの日記』（訳：高橋文子、みすず書房）が紹介されている。

今回の講演では、芸術作品を自律的な有機体とみなすクレーの基本概念、なかでも自然の生長過程と芸術の制作過程とのアナロジーについて、詳細に考察が行われている。「クレーの自然観や、特に植物の生長において解き放たれるような大地の内在的な育む力に関する彼のイメージは、芸術家としての自己理解や彼の全芸術作品において、多層的な意味を持っている」というケルステン教授の確信は、なにより徹底した調査と緻密な作品分析に基づいている。また、この概念がドイツの劇作家・詩人のフリードリヒ・ヘッベルの『批評集』と美術史家のヴィルヘルム・ヴォリンガーの『抽象と感情移入』によって影響を受けていることも、クレー自身の書簡や日記から証明されている。こうして、芸術作品は「自然と同じ価値を持つ独立した有機体」であること、すなわち、「深い内的本質において自然とは関係を持たないという前提から出発する」というヴォリンガーの思想が、クレーの有機体概念の根本原理であることを明確に示されたのである。さらに、クレーの有機体との実践的・理論的取り組みが建築美術と関連していることを、「フォルムの明瞭な構成と精密な有機性」、「部分と部分、そして部分と全体との目で測れる比率が、他の自然あるいは人工の有機体では隠されている数量関係に呼応している」、「この数というものが冷たいものではなく、生命の息吹である」などの説明によって示されているが、これもクレーの作品を生みだした根本概念やバウカステンシステムを理解するうえで、きわめて重要な指摘である。

残念ながら、紀要に掲載できなかったゴツケル教授の講演「クレーの実験的芸術：絵画の実践と自然的生成過程」も、開かれた創造過程を「新しい自然性」とするクレーの理論を多数のスライドとともに紹介され、とくにE.T.A. ホフマンやセザンヌとの比較検討は新鮮で刺激的であった。感情的な主観的反応を超えた自然の知覚を作品化しようとするクレーの試みをより具体的に示されたのである。展覧会のテーマである有機的な制作プロセスとも関連したお二人の講演は、クレーの実践と理論について深い示唆に富むものであった。紙面を借りて感謝を申し上げたい。

